
いけにえ

麻未夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いけにえ

【Nコード】
N5570P

【作者名】
麻未夢

【あらすじ】
目の前に落ちてきた級友。ショックを受けて立ちつくす主人公を、学級委員を務める深見が慰める。深見は、級友の自殺をイジメが原因だと断言した。だが、クラスでイジメなどの問題が起きている事など知らなかった主人公は困惑する。そんな主人公に、深見は学級委員としてクラス全員をまとめる為に取った、ある手段を明かした。

試験の最後の日程が終わり、結果について心配しても仕方がないと今はその件については考えず、たまたまよく試験が終わったという喜びと解放感から、校舎を一步出たところで立ち止まって高い空を見上げた事は、後になって思えば私の幸運であり、同時に悲運でもあった。

「……………」

グシャツという擬音だけでは到底再現不能な何とも気持ちの悪い音が目の前で響いたのは、その一瞬後。

私は、足下を見た。

そこには、血溜まりの中で、腕や足をあり得ない方向に曲げて力なく横たわる女生徒の姿。そして、私が直前に見たものは、その女生徒が上から降ってくる瞬間だった。

「葉山さん……？」

彼女から流れ出す血が私の革靴の先を汚す頃になって、私はようやくその女生徒が誰なのかに気がついた。

彼女は、クラスメイトの一人だった。おとなしいので、あまり目立ちもしないし、さほど親しいわけでもないが、私のクラスは全員本当に仲が良く、この葉山さんとも少なくとも挨拶程度は交わす仲だった。

その葉山さんが足下に転がっている。

私は、ただ呆然と足下の死体—— どう見ても生きているとは思えなかった—— を見つめる事しか出来ずにいた。

代わりに、別の生徒が大声で叫び声をあげるのを、私は意識の片隅で聞いたような気がする。

「大変だったね、大丈夫？」

彼女——私のクラスの学級委員を務める深見さんが、あまりのショックで茫然自失の私を保健室へ連れて行って、先生の許可を取って煎れてくれたコーヒーを私に差し出しながら、そう声をかけてくる。

彼女は誰かの叫び声を聞いて教室の窓から下を覗き込み、あの惨状に気がついたらしい。

そして、その前で呆然と佇む私の為に、駆け降りてきてくれたのだそう。

「靴、拭いておいたからね」

そう言って微笑む彼女に、私は無理矢理笑顔を作って「ありがとう」と返す。

受け取ったコーヒーを少し口に含むと、ほんの僅かながら落ち着きを取り戻したような気がした。

「……あれ、葉山さん、だよ」

私は、血溜まりの中の彼女の最後の姿を思い出さないようにして、その名前を出した。

「うん」

深見さんは、あっさりそれを認め、続けてこう言う。

「彼女、苛められてたからね」

「苛め？」

そんな話は初耳だった。私の声のトーンからそれを察したのだろう、深見さんは少し気まづげな表情を作り、

「ああ、あなたは知らなかったのね」

と、口を閉ざす。だが、それで私を納得させられるわけがないと判断したのだろう、こう続けた。

「多分、クラスの半分はあなたと同じで、彼女が苛められてたなんて知らないと思う」

「どういう事なの？」

「彼女、葉山さんね、『いけにえ』なのよ」

「え？」

「うちのクラス、全員が仲良いよね。それ、おかしいって思ったこと無い？」

そう訊かれて、私は何も考える間もなく、思わず頷いていた。

「仲が良いのなら良いじゃない。別に、おかしくなんて——」

「私ね、このクラスの学級委員になった時に、こう決めたのよ。このクラスを全員仲良しにしてやろうって。だって、その方が楽しいじゃない」

それは確かに、クラス全員の賛同を得て学級委員に任命された彼女が、抱負として語った言葉だ。

「1人を『苛め』の対象にするとね、それが簡単にできるの」

「葉山さん、何かしたの？」

「ううん。ただ、葉山さんはおとなしいし、『いけにえ』に向いてるかなって」

「そんな……」

「勿論私だって、40人全員を仲良くさせる事ができれば良いって思って、色々考えたのよ。だけど、そんな方法は思いつかなかった……でも、40人の内のたった1人を犠牲にすることで、簡単に他の39人が仲良くできるなら、それで充分じゃない？」

深見さんが、私を家まで送ると言ったので、私たちは一緒に駅のホームに並んだ。

私は、さっき保健室で聞かされた話が、頭の中でグルグルと回っていて、深見さんから声を掛けられている事にしばらく気がつかなかった。

だが、彼女の口から飛び出したある言葉が、何故かやけにハッキリと耳に入り、私は愕然として彼女を見返してしまう。

「次は誰を『いけにえ』にしたら良いと思う？」

「……………え？」

「また、誰かが『いけにえ』にならなきゃ。ね？」

「ちよっ、ちよっと待ってよ。だって、それでまたその子が自殺したら……」

「その時は——」

その時、向かいのホームを電車が通過していった。その音に彼女の声がかき消され、彼女が何を言ったのか解らない。だが、私は何故か彼女がこう言ったのを確信していた。

——あなたが『いけにえ』になる？

電車が遠ざかり、今度は私たちの立つホームで、電車が通過するというアナウンスが流れる。

私は一歩後ずさり、電車が来るのを待った。

そして、特急電車がホームに入ってきた次の瞬間、私は深見さんを思い切り突き飛ばしていた。

密かに苛めに遭って苦しんでいたクラスメイトを救えなかった事を悔やみ自殺した、責任感に溢れた学級委員。

私は、そんな風にかかれた新聞記事を読みながら、私たちのクラスがこの先、一体どうなってしまうのかとても不安だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5570p/>

いけにえ

2010年12月17日22時40分発行